

第4章 実践研究の基盤となる生活教育環境

第1節 人間の豊かな感性と無限の可能性を育むための視点

人間は皆、世界と人間の不思議や神秘を深く感じ取る、豊かな感性を持っている。それぞれが未来に見事な花を開き独自の世界を創造する、無限の可能性をその内に秘めている。

その感性や可能性は、人間の内部でどのように養われ、いつどのような形で開花するのか、それを明確に述べることは困難である。個々の個性や生育環境、それぞれの歩み方によって、ひとりひとりがまったく違う、多様な人生を創造するのである。

私たちは教師として、あるいは親として、子どもたちの感性を豊かに育み、ひとりひとりの可能性を最大限に引き出したいと願う。しかしながら、人間の感性を育み可能性を引き出すことが、私たち大人にどこまでできるのだろうか。自分自身を率直に顧みさえすれば、その疑問は当然のように湧いてくるのではなかろうか。

はたして私たちは、自分自身の感性を十分に育むことができているであろうか。自分自身の可能性を十分に開花させることができているであろうか。自分自身の感性や可能性の育成さえままならない者に、子どもたちの素晴らしい感性と可能性を育むことができるとは思えないのである。そもそも、感性の豊かさや可能性の広がりという点においては、私たち大人よりも子どもたちの方が明らかに勝っている。これは最近の赤ちゃん研究で実証されつつある。

人間は皆、万能ではない。完璧な人など、どこにもいない。教師といえども、親といえども、むしろ欠点だらけの弱い人間であろう。しかし、それを我々は忘れている。ほとんどの大人たちは、自分のことは棚に上げて、子どもたちにばかり理想的な歩みを押しつけているのである。そして、自分たちの作ったカリキュラムや教材に過度に依存しているのである。

教育という点に関しては、次のような論説がしばしば聞かれる。すなわち、education（＝教育）という言葉の語源・educate（＝引き出す）を取り上げて、教育とは子どもたちに何かを教え込むことではなく、子どもたちの中から可能性を引き出してあげることなのだとする説である。この説明は一見、子どもの立場に立つ、すぐれた論理に聞こえる。しかし、ここには大きな落とし穴がある。

本来は、大人が子どもの可能性を引き出してあげるのではなく、子ども自身が自分の可能性を引き出しているのではないだろうか。確かに、大人の働きかけが何らかのきっかけとなって、子どもたちの可能性が急速に花開いていく、という場面にはしばしば遭遇することがある。しかし、引き出してやろう、教育してやろう、という奢り高ぶった姿勢は、逆に子どもたちを萎縮させ、子どもたちの可能性を見失わせてしまう。すべてを教師の思惑通りに運ぶように指導してしまうことにつながっていく危険がある。

私たちは人間の感性の素晴らしさと無限の可能性を確信すると同時に、人間の教育力の限界をも感じてきた。そして、人間の教育力の限界を補うことのできる生活教育環境を目指して、実践研究を続けてきた。

それは第一に、自然の教育力を最大限に生かす環境である。

第二に、多様な人間関係とダイナミックな活動を保証することができる環境である。

第三に、自己を素直に表現し、その表現を通して自己を見つめ、認識し、自己コントロールを身につけることのできる環境である。

第四に、誰もが自由に参加し、多くの人と関わり合うことで、互いに助け合い補い合いながら、主体的に学び合う環境である。

第五に、それらの活動を促進するために、スタッフがより幅広く個を把握し、きめ細かく対応することのできる環境である。

以下に、トモエの生活教育環境の概要を記すことにする。

第2節 人間の感覚を刺激し感性を豊かに育む自然環境

人間の感性は、どのように育てることができるのであろうか。豊かな感性を持ち合わせている子どもたちに対して、大人ができることは一体どのようなことなのであろうか。

プロの音楽家や美術家は言う。楽器や素材の扱い方、演奏や造形などの技術的な点は、子どもたちに教えることができる。しかし、感性の部分を教えることはできない。何故ならば、何をどのように感じるのかという点は、ひとりひとりのまったく個的な内的活動だからだ。“このように感じなさい”と指導することは不可能なのだ。

自然界は、人間の感性を刺激し養ってくれる要素で満ちている。大空の色彩と雲の造形は刻々と姿を変える。風のリズムや肌を撫でる空気の心地よさ。大地から香り立つ優しい匂い。土や砂や水の柔らかさと温かさ。木々や草花の姿。昆虫や動物たちの動き。森を歩けば、鳥たちの歌声と共に、足元の葉や枝が様々な音色を奏でてくれる。音楽も色彩も造形感覚も、ありとあらゆる要素が自然の中にはある。

昔から「自然に勝る教師なし」と言われてきたように、人間の素晴らしい感性はカリキュラムや教材では育てることはできないのである。自然界こそが人間の感性を様々な角度から刺激して養ってくれるのである。人間の豊かな感性は、子どもたち自身が自然の中で様々な体験を積み重ねることで、自ら養い育んでいくものである。

したがって、トモエの実践研究は、周囲の自然環境ぬきには存在しえないのである。

札幌市の中心部から車で約30分、藻岩山を間近に望む山の中腹に、トモエはある。周囲には民家が数軒建っているだけの、静かな森の中である。

学園の敷地は約2000m²であるが、周辺の広大な森全体がトモエの活動領域である。この森の中で、親子の普段の活動範囲は、園舎を中心におよそ1km四方に及ぶ。

子どもたちは常時、大人たちと共に森の中で活動を展開する。

春には、雪どけの水の流れと戯れ、ムンムンと立ちのぼる土の匂いを嗅ぎながら、四つんばいになって崖をよじ登る。白樺の樹液を味わい、採取してきた山菜を料理する。沢に棲息するカエルやサンショウウオやザリガニを捕まえ、観察する。

夏には、捕虫網を手にトンボやチョウやバッタを追いかけて走り回り、ヘビを捕まえ、木に登って飛び降りる。色とりどりの草花を愛で、色水遊びを楽しむ。全身泥だらけになって土と水を満喫する。

秋には、落ち葉を集めてイモやカボチャを焼き、ヤマブドウやコクワなどの森の味覚を存分に堪能する。紅葉やドングリを利用して工作を楽しむ。キツネやリスなどの野生動物に遭遇することもある。

冬には、雪合戦で動き回り、長い斜面をソリやスノーボードで滑走する。斜度が四十度以上ある急な崖をすべり下り、園舎の屋根からもジャンプする。雪像やカマクラを作り、雪と氷に絵を描く。

これら自然の中での活動をさらに創造的に楽しむために、いくつもの遊具を手作りで設置している。

二本の大きな木にU字型に太いロープを結びつけて作ったブランコは、高さが最高で5メートル以上になる。トゥリーハウスは8畳ほどの広さで二階建てになっている。大型のネットが木々の間に張られており、ゆらゆらとした浮遊感を楽しめる。沢の谷間にはターザンロープが仕掛けられており、滑車で向こう岸に渡ることができる。すべて、スタッフと父母有志によって製作されたものである。

この他、烏骨鶏や犬などの小動物を飼育し、畑では多種類の野菜を栽培している。

また、時には環境の変化を求めて、近隣の自然公園に出かけたり、海水浴や登山に行くこともある。特に冬の海は、白と黒のモノトーンの世界でインパクトが強く、子どもたちは海水の冷たさも忘れて波と戯れるのである。

子どもたちは五感を総動員して、大自然を全身で受け止めている。美的な感覚や敏捷性などの運動能力はもちろんのこと、どこまでが安全でどこからが危険かという動物的な直感も、自然の中での活動から養われていく。

森林浴によって、フィトンチッドという物質が人間に治癒的な作用を及ぼすということが実証されている。自然の中では、刺激の強過ぎる人工物に感覚を狂わされることもなく、時間に追われてあくせく動き回る必要もない。子どもたちに対する環境としてだけではなく、人間が人間らしく生きる上で、自然は私たちになくってはならないものであると実感しつつ、実践研究を進めている。

<参考資料>

トモエプレイマップ



第3節 多様でダイナミックな活動を展開できるオープンスペースの園舎

以上のような恵まれた自然環境を生かしつつ、さらに多様でダイナミックな活動を展開することのできる園舎は、この実践研究に欠かせない要素のひとつである。

トモエの園舎は、総面積約800㎡、鉄骨一部二階建ての建物である。各部屋の仕切りがない、オープンスペースとなっている。

室内にいても外の自然を身近に感じることができるよう、四方の壁は、美的デザインを考慮しつつ構造上可能な限りガラス窓にしてある。最も大きいホール正面の窓は、縦4m・横7mであり、その真上には一辺4mの正三角形の窓ガラスが、外の自然の景色を映し出している。玄関をくぐると、正面に見えるホールの大きな窓から、森の深い緑が目飛び込んでくるのである。

園舎は、山の中腹の斜面という立地条件を生かして設計した。一階は主に高さの違う3つのフロアから成っており、それぞれのフロアが幅の広い階段で結ばれている。

最も下のフロアは、体育コーナーと呼ばれている。幅21m・奥行7m、天井までの高さは最大で8.5mの空間である。

ここには、マット・すべり台・一輪車・折りたたみ式のトンネル・ボール類・縄跳びロープなどの遊具の他に、グランドピアノ2台とドラムセットも置いてあり、常時子どもたちが演奏して楽しむことができる。

ここで子どもたちは、鬼ごっこ・ボールゲーム・闘いごっこ・縄跳びなど、身体を思いきり動かして活動している。このコーナーの窓の棧は高さ約2mあり、ここから飛び降りに挑戦する子どももいる。

時には、天井の二か所に太いロープを結わえて特大のブランコを造ったり、滑車を使って8mの高さまで吊り上げることのできるゴンドラを造ったり、テーブルを何台も積み上げてジャンプ台やすべり台を造ったりして、ダイナミックな活動を繰り広げている。

そのひとつ上のフロアには、折り紙・ハサミ・クレヨンなどのある製作コーナーと、粘土やドミノなどのある粘土コーナーがある。扮装用の着物やドレスも置いてあり、ここで子どもたちは、絵画・製作・お店屋さんごっこなど、思い思いの活動を楽しんでいる。

さらにひとつ上のフロアにも、二つのスペースがある。絵本コーナーは畳を敷きつめてあり、ゆったりと読書を楽しむことができる。ベビーコーナーもやはり畳敷きである。後述するように、園児と共に毎日数多くの母親も参加しており、たくさんの赤ちゃんも一緒に来ているのである。ハイハイやヨチヨチ歩きの乳児たちが何人もいて、このベビーコーナーでおむつを替えたり昼寝をしたり、おっぱいを飲んだりしている。多い時には10人以上の乳児たちで賑っている。

玄関の上方には、こじんまりとした空間のブロックコーナーがある。このコーナーは、ブロックでの活動の他にも、基地ごっこの拠点として利用されることが多い。

床には数か所に隠し扉が造ってあり、地下に潜り込んで忍者ごっこを楽しむことができるようになっている。

二階は職員室で、事務作業やスタッフのミーティングが行われる。二階からでも階下全体の様子が見渡せるように設計してある。

以上のコーナーの設定は便宜上のもので、日常の活動の中では明確に区別されているわけではない。なにしろ、子どもたちの発想と行動は、大人が作る小さな枠よりも遥かに大きく広がっている。例えば、体育コーナーでの鬼ごっこは、時に園舎全体を走り回る規模に発展する。クレヨンで体育コー

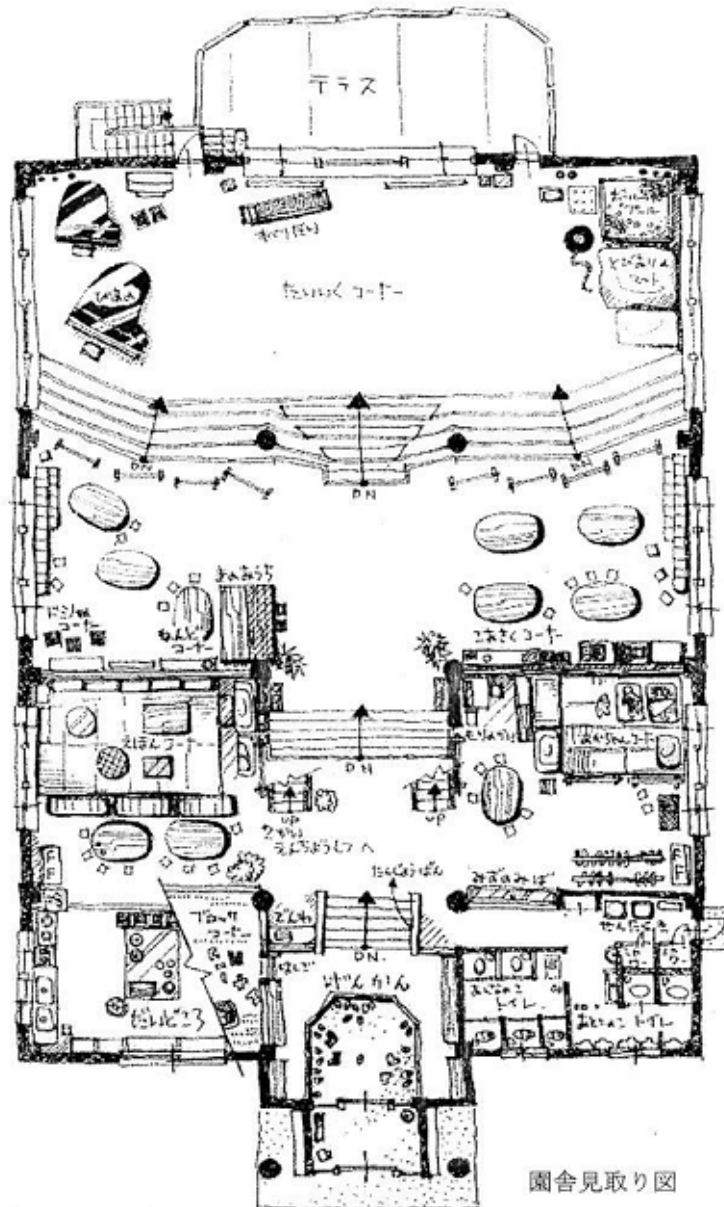
ナーに持ち込み、大型の紙をホールいっぱいに広げて大々的な絵画を楽しむこともある。

各フロアをつなぐ階段も重要な役割をはたしている。長い板を立てかければ、階段は特大のすべり台に早変わりする。マットレスに子どもたちを乗せて階段をそのまますべり下りると、段差が刺激的なスロープとして楽しめる。体育コーナーを舞台にして演劇や音楽の演奏をする時には、この階段は立派な観客席にもなる。

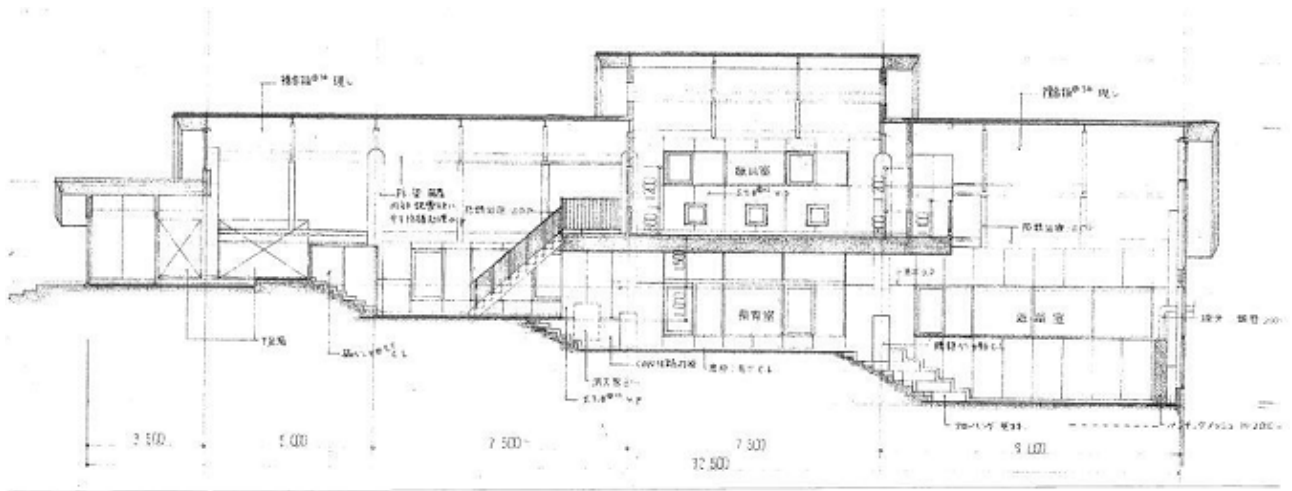
トモエの園舎は、そのオープンなスペースの故に多様な活動が可能であり、様々な用途に利用されている。子どもたちの日常的な活動以外にも、パーティー、コンサート、演劇、キャンプ、あるいは結婚式の会場としても使われている。

<参考資料>

園舎見取り図・設計図



園舎見取り図



第4節 素直な自己表現から自己認識と自己コントロールが身につく自発活動

トモエは朝10時に始まる。昼食までの約2時間は自発活動の時間である。しなければならないことが予め決められているわけでもなく、皆で一斉に同じことをする必要もない。それぞれが好きなおとこで、好きな人と、好きな活動に熱中する。子どもたちの豊かな発想を重要視しているのである。

クラスの枠組みは緩やかなため、同年齢や異年齢の様々な仲間と一緒に活動することができる。子どもたちは、友達同士で、あるいは自分の母親と、友人の父親と、スタッフと、少人数や多人数のいろいろなグループで活動している。

誰とどこで何をするかは、それぞれの子どもの主体性に委ねられているのである。

自分の好きなことに思い切り集中すると、快の感情をたっぷり味わうことができる。この快の感情が、子どもたちの意志の力を育てるのである。そして、自分の苦手なことや興味の薄いことにも関心を向け、未知の世界への挑戦を促すことにもつながっていく。また、少々の不快な体験に遭遇しても、その不快に耐え、あるいは乗り越え、もしくは逆にその不快な出来事を楽しんでしまう、心の余裕も生まれてくるのである。

自分の好きな活動に熱中できるとはいえ、自分の思い通りになることばかりではない。集団生活の中では、むしろ思い通りにならないことの方が多い。また、乳幼児期は素直な自己表現ができる時期でもある。それぞれが個々の活動に集中し、自己を素直に表現すれば、当然のことながら、互いの意志が衝突する場面が出てくる。

時には取っ組み合いの大きな喧嘩になることもしばしばある。しかし、激しい喧嘩になっても、周囲の人たちは、すぐに止めに入ったりはしない。じっと彼等の様子を伺っていて、本当に必要と思われる時に介入する。

それでも多くの場合は、大人の介入は不要だ。子どもたち自身で解決できるのである。そして、喧嘩の後は、大人では信じられないほどすぐに仲直りできるのが、この乳幼児期の子どもたちである。むしろ喧嘩をした後の方が、関係が深まっているのを目にする。

小さいうちに喧嘩をたくさん体験しておくことは、人間の発達にとって非常に重要である。時にやられ、やり返し、互いに痛い思いをすることによって、相手の痛みを自分のこととして実感できる。自分の言動を見つめ、相手に配慮し、自らの感情をコントロールすることを学ぶのである。頭だけで理解することとは違って、身体で覚える体験は、真の意味で身につく学びとなる。

子どもたちは午前中の自発活動と共に、午後から設定されている課題学習によっても大きく刺激される。主に年齢別に集まって、森への探険・ゲーム・体育・音楽・絵画・製作・クッキングなど、その季節と年齢に応じた多彩な活動を用意している。

時には朝から全員で山や沢へ探険に出かけたり、登山・海水浴・自然公園などへ出かけることもある。ピクニックやキャンプなど、家族ぐるみで楽しむことのできる、年に何度かの特別な行事も企画する。

トモエでは、発表会や運動会を行わない。何故なら、それらは親に見せるために、何週間も前から練習するのが常だからである。同じことを何度も何度も飽きるほど繰り返して練習すれば、確かに上手にできるようになるだろう。しかしながら、子ども自身が心から楽しんで取り組むことは、ほとんど望めないのである。

毎月の誕生会では、子どもたちが即興劇を披露する。事前の練習はせず、その場でストーリーの概略を説明するだけである。子どもたちは嬉々として自分の役割に取り組み、思いがけないアクションやセリフで周囲を楽しませてくれることもある。

レクリエーション大会でも、前もって練習することはない。親たちに見せるための競技やゲームではなく、親子で一緒に楽しむことができるゲーム内容にしている。子どもよりも大人の方が興奮してゲームに興じているのである。

< 参考資料 >

基本的指導計画

指導者 園長、教師（男5名、女3名）

指導法 指導者のチーム・ティーチング（複数協力指導）

指導日 月～金曜日の週5日制（10：00～14：00）

1日の流れ	1年間の主な体験学習	主な学習目標	指導上のポイント
10：00 自発種動 (個人学習) (グループ学習)	・室内コーナー ・屋外遊具 ・山、川、丘、海などの大自然 ・登山、沢登り、ソリスベリ ・動物、昆虫との触れ合い	・人との関わりによる人間理解 ・たて社会の人間関係 ・創意工夫し、自ら考える力を養う ・自発的、主体的に学習、自信を持たせる ・大自然の神秘性を感じられるように ・たくましく行動力を自然から学習 ・心身共に健康を保つ ・各コーナーでの知的、感性的な学習 ・順応性を養う	・園児が自発的に行動できる環境を与え、自ら遊びを創造し個人、グループ遊びへと発展するように導く。 ・自発性、創造性、主体性、協調性、順応性を養う。 ・自由遊びの中で友達関係を体験することで、正しい人間関係が身につくよう導く。 ・子どもの人間関係は、年々成長し、正しい社会性が生じる。 (互いの人格を高め合う関係を創造する)
11：40 片付け 整理整頓	・全員で片付け、整理整頓	・年齢発達による公衆エチケット	・自分達の園舎であり、全園舎を自分が使用するため、すべてを全員で整理整頓する。 ・年長児としての責任感を養う。 ・整理できない子への注意。
11：50 昼食	・食事準備 ・感謝 ・弁当（暖かい日は外で） ・片付け	・テーブルぶき等、自分達でする。 ・父母、働く人、弁当に感謝 ・好きな人と一緒に、楽しく ・後片付け	・両親への感謝 ・お弁当を作ってくださった方への感謝 ・私たちのために働いてくださる方への感謝
12：40 全体集会 課題学習	<ul style="list-style-type: none"> ・うた、リズム ・お話 ・誕生会 ・お楽しみDayの劇 ・絵画（水彩、クレヨン、ウォーター・ボディ・スノーペインティング等） ・製作（折り紙、切り紙、粘土、ダンボール等） ・音楽（歌、合奏、オペレッタ等） ・体操、ゲーム ・自然観察 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体での行動の責務を養う ・全員で話を聞く楽しさ ・誕生者の誕生を祝う ・教師の創作劇の観劇、子ども縁日等 ・色の調和、調合、線の持つ美しさを中心に体験 ・形の面白さ、楽しさの体験 ・自然の中の土や草や小枝を使い遊ぶ ・美しい音を聞く ・様々な音を聞く ・からだ全体を使って楽しむ ・四季の変化の美しさの体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動の責務（話を聞く、うたう、体操） ・園全体の問題を考えるための導入 ・全員で誕生者の誕生を祝う ・自発種かへの導入と発展 ・総合的な学習を習得する ・個々の成長、発表準備の把握 ・四季の変化を感覚でとらえるよう常に自然に触れる ・基本的な学習 ・選択課題学習
13：30 会話読書指導 (担当制) 13：45 お別れ 14：00	<ul style="list-style-type: none"> ・1日の出来事について話し合う ・明日への期待について話し合う ・読書、紙芝居 ・ゲーム、手遊び ・お別れのあいさつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい体験、失敗について共に考え、分かち合う ・明日したいことを等、思考する ・父母や教師による本、紙芝居 ・園生活の個々の責任について話し合う ・四季の変化、からだの神秘について知る ・動物、宇宙について知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい体験を互いに分かち合う ・様々な問題について互いに考え、どうしたら問題が起らないか話し合う ・互いの問題について、注意できるように ・自己の考えを正しく伝えるように ・明日への期待をもたせる ・読書、お話、紙芝居

年間活動計画表

		春	夏	秋	冬
主題		新しい友だち 共に楽しく	力いっぱい・成長	充実・楽しい会話	協力・責任 お別れ
言語	人	進級 自分と友だちを知る	心とからだの成長	生命 心と体の不思議・神秘	人間を知る
	自然	雪どけ・芽吹き 春の動植物	新緑から夏へ 宇宙(地球、太陽、星)	紅葉から冬へ・実り	雪・氷
環境	土水雪	特に春は・・・雪どけ 水で遊ぶ残雪で遊ぶ (ソリすべりなど)	シャボン玉、色水遊び、泥んこプール、 水鉄砲、プール、海、泥んこ遊び、砂遊 び、色水遊び、笹舟流し		雪合戦・ソリすべり・ 尻すべり・崖すべり・ チューブすべり・氷遊 び・かまくら・雪像
	山 沢	散策、山菜とり、山登り、沢探検、 木登り、葉・草遊び、ツリーハウ ス、ブランコ、山のブランコ、基地	特に秋は・・・木の実(コクワ、山 ぶどう、山グミなど)とり、焼きい も、落ち葉遊び、木の実遊び		雪山登り、雪の沢探検、 崖すべり、山の尻すべ り、山のブランコから の飛び降り
	畑	花壇作り 畑作り	種まき 草取り 水かけ	収穫 片付け	
健康	体 育	滑り台、ボール遊び、マット遊び、縄跳び、一輪車、ボールプー ル、跳び箱、飛び降り、馬とび、ロープ遊び、かけっこ、平均台、 はしご登り、プール、鉄棒、輪ぐり、鬼ごっこ、アスレチック、ほ か			特に冬は・・・ソリすべり、 チューブすべり、尻すべり、 崖すべり、スノーボード、ス ノーモービル、雪像づくり、ほ
	食	クッキング、野菜づくり・収穫、木の実の収穫			
表現	絵 画	クレヨン画、水彩画、ぼかし絵、貼り絵、スクラッチ、大型 絵画、スタンプ遊び、ボディペインティング		特に冬は・・・ スノーペインティング、氷の着	
	製 作	折り紙、工作、木工、年度、ダンボール製作、ブロック遊 び、ドミノ遊び、ペープサート、楽器作り、染色、大型共同		特に冬は・・・ 雪像、かまくら	
	音 楽	トモエの歌、季節の歌、楽器遊び、リズム遊び、リズムダンス			
人間関係		相性の合う友だちとの交流(ごっこ遊び、グループ遊び) 異年齢集団の交流、好きなスタッフとの交流、様々な大人との交流 ゲーム、集団での活動、全体での活動			
園外活動		真駒内公園 八垂別の滝、他	海、藻岩山、 真駒内公園、発寒川、 イチゴ狩り、他	海、真駒内公園、他	北の沢スキー場、他

第5節 親たちも自由に参加し、皆で補い合いつつ主体的に創造する人間関係

トモエは親たちにも開放しているため、毎日たくさんの方が集まる。3歳から6歳の園児たちはもちろんのこと、母親・父親・祖父母・2歳以下の弟妹たち・小中高大学生の兄姉も参加している。

一日あたりの概数では、園児60～70人、母親50～60人、父親3～4人、祖父母2～3人、弟妹10～20人、兄姉5～10人、このほか卒園父母や実習生、あるいは見学者なども加わって、トモエの日常が創造されている。一般的な活動日では百数十名が参加しているが、特別な行事の日となると三百名近い人数が集まることもある。

まさに老若男女、様々な年齢層の様々な個性の人々が、毎日トモエで体験を共有するのである。トモエが「幼稚園」でありながら「幼稚園」の枠を越えた場である理由が、ここにある。トモエは、かつての日本にもあった下町の長屋のような、大家族的な交流が織りなす社会共同体的な生活教育環境になりつつある。

子どもたちはそれぞれの活動に熱中しているが、親たちもやはり自発的に様々な活動を行っている。

子どもたちと一緒にキャーキャーいいながら遊んでいる人。子どもたちの活動を観察しながら学んでいる人。自然の中をのんびりと散歩している人。ソファでゆっくりと本を読んでいる人。コーヒーを飲みながら親同士で談笑している人。園内のあちこちを綺麗にしている人。次の行事の企画を準備している人。園長やスタッフに悩み事の相談をしている人。等々。

子どもたちと同様に親たちに対しても、“これをしなさい”といった指示はほとんどしない。参加すること自体も強制ではなく、各自の意志に委ねられている。それぞれが自ら感じ考えて、主体的に行動できるようにしているのである。

こうしてたくさんの人が集い、それぞれが様々な活動を展開する生活教育環境の中では、親たちが体験し学ぶ事項は非常に多い。

我が子だけではなく、たくさんの子どものと接することを通して、「人間」について深く考察することができるようになっていく。乳幼児期は、人間が本来持っている素晴らしい感性と、純粋で素直な自己表現に満ちている。親たちは、子どもとは何か、人はどのように成長発達していくのかを、様々な発達段階にある子どもたちと接することによって、体験しつつ学んでいる。

たくさんの子と親しく関わり合うことによって、それぞれの人間の個性を肌で感じ取ることが出来る。一人一人が皆違って、共感できる場所も反発を感じる場所もすべて含めた、その人の丸ごとを認めることも学んでいく。そして、素晴らしい部分も醜い部分もある自分自身をも、そのまま受け止めることができるようになっていくのである。最近の若い世代は、幼少期に人と関わり合う体験が不十分なまま育ってきた例が多い。そのため、他者とどのように関わったらよいのかが分からない人、人と関わることを恐れる人が増えている。トモエでは、子どもだけではなく大人たちも、自己を素直に表現し、他者とぶつかり合ったり共感し合ったりすることを通して、人と関わることの喜びを学び直しているのである。

子どもを理解し人間を理解することは、自分自身の存在への深い考察へとつながっている。子どもたちの成長を邪魔することのないように、子どもにばかり期待をかけるのではなく、自分自身に期待をかけ夢を持ち、親自身が生き生きと毎日を創造することができるように、親たちの意識は次第に進化しているのである。

< 参考資料 >

2005年度 トモエ幼稚園登園者数

月	登園日数	園児	父	母	祖父母	乳幼児	小学生	中高生	卒園父母	見学者	合計
4月	17	1,070	92	949	52	246	200	26	30	11	2,676
5月	17	990	49	766	34	200	134	17	40	8	2,238
6月	22	1,371	36	1,089	48	298	128	22	44	23	3,059
7月	20	1,450	139	1,206	35	341	280	30	79	6	3,566
8月	11	680	13	507	16	164	70	9	19	4	1,482
9月	20	1,434	34	1,069	26	365	123	23	43	29	3,146
10月	20	1,531	95	1,186	42	391	192	73	132	28	3,670
11月	19	1,368	31	1,084	38	373	129	24	57	1	3,105
12月	16	1,186	91	966	45	338	175	34	72	15	2,922
1月	11	749	47	614	29	230	87	17	31	13	1,817
2月	20	1,225	53	1,025	49	347	142	36	51	12	2,940
3月	13	997	60	827	38	261	145	32	41	11	2,412
計	206	14,051	740	11,288	452	3,554	1,805	343	639	161	33,033
月平均		1,171	62	941	38	296	150	29	53	13	2,753
日平均		68	4	55	2	17	9	2	3	1	160

第6節 幅広く個を理解し、きめ細かな対応を可能にするチームティーチング

トモエでは、クラスの枠組みを越えて、子どもも大人もそれぞれが屋内外で自発的に活動している。スタッフの動きも同様である。要所要所に位置して、子どもたちや親たちの活動に目を配る。園長と事務長を含めた男性6名・女性4名、計10名のチームティーチング制である。

トモエでは、スタッフを先生とは呼ばないことが多い。教師という立場は、子どもたちに対して上から何かを教え導いてあげる存在、という固定した目線に留まってしまいがちである。しかしそれでは、子どもたちと本音で対等に関わり合うことは困難である。そこで、自らをスタッフと呼びつつ、子どもたちとの柔軟な関係を常に心がけようと意識しているのである。

スタッフは、子どもたちと一緒に自発的に活動したり課題学習に取り組んだりしながら、その場を盛り上げたり、新たなアイデアを提供したり、必要な子には手を貸したり、危険がないか注意したりする。

さらに、ひとりひとりの個の様子を観察する。活動の中でどのような動きや表現を見せているのか、友達との人間関係はどのように変化しているのか、親子関係はどのように形成されているのか、などがポイントとなる。

一人のスタッフでは手が足りないところには、別のスタッフが助けに入る。あるスタッフが一人の個人に集中して関わっている時には、別の何人かのスタッフで全体を見守る。多くの人手が必要な時には、参加している親たちにも協力してもらって、全体と個に配慮する。10人のスタッフが協力し合うことによって、トモエの毎日の活動は成り立っているのである。

クラス担任制では、たった一人の教師が、10人から20人以上の子どもたちすべてを指導しなければならない。全体をまとめていくためには、細かい点ひとつひとつに注目することは非常に困難である。クラス全員に平均的に関わろうとするため、深い人間関係を形成することが難しい。個に目が行き届かず、子どもたちに対応しきれないことが多い。

チームティーチングによるスタッフの柔軟な動きによっては、それらはかなりの程度補うことが可能である。全体への働きかけと同時に、ひとりひとりの個にじっくりと時間をかけて向き合うことができる。より深い関係を形成し、個をより深く理解することもできるのである。トモエでは、抱っこ・おんぶ・肩車など、子どもたちとのスキンシップが十分にできる。これも、チームティーチングによる効果のひとつであろう。

スタッフのチームワークの源はミーティングにある。親子が帰った後、スタッフ全員が集まって話し合う時間が毎日設けられている。その日親子がどのような活動をしていたのか、その様子をそれぞれが報告し合う。そして、翌日以降にどのような活動を展開するか、手助けが必要な個人に対して誰がどのように関わっていくべきなのか、といった事項を考え合う。

人間はどうしても自分の立場に立ってしか、自分のフィルターを通してしか、物事を見ることができない。そして、自分の見方が正しいと決めつけてしまいがちである。多面的な存在である個に、ひとつのレッテルを貼って見てしまうことになる。それでは幅広く人間を理解することはできない。人はいろいろな側面を持っていて、その時と場によって様々な表現を見せるものである。スタッフがそれぞれの見方や意見を出し合うことによって、自分とは違う個の捉え方、対応の仕方を学び合うのである。

チームティーチングは、個々へのきめ細かい対応を可能にするためのものであると同時に、スタッフ自身が先入観や固定観念に陥ってしまうことを予防するためのシステムでもある。

このチームティーチングの基盤となっているのがスタッフ研修会である。毎日のミーティングに加えて、年に何度も、総合的な人間探究のための研修会を開いている。話題の本や論文・新聞記事・映画・ドキュメンタリー番組など、多彩な題材を基に学び合う。現代の社会の在り方を把握し、人間の心理を分析し、親子の現状と展望について考察する。時には、脳生理学や教育心理学など、各専門分野から講師を招いて人間研究の最先端を学ぶのである。

トモエのスタッフは、自分自身が学びたいから、自分自身が成長したいから、と参加してきた人たちばかりである。何よりもスタッフひとりひとりが、いかに誠実に自分と向き合い、自分に対して夢と期待を抱き、自分自身の人生を歩もうとしているのか、それが直接子どもたちに伝達されているのである。

< 参考資料 >

トモエ・スタッフ研修

主なテーマ

- * 目に見えないものを大切に
- * 総合的な人間科学
- * 私は誰か？私は何者か？
- * 生きる意味を考える
- * 生命の誕生の神秘と死の意味について
- * あなたにとって子どもとは何ですか？

- * 個性・人格・感性はどのように育つのか
- * 家族関係における乳幼児の性格形成
- * 母子関係について
- * 偽りの自己と真の自己
- * 人間の心の闇
- * 人間の創造力とは
- * 動物的な直感を養う
- * 脳の発達
- * 人間の免疫機能
- * 健康医学的・社会共同体的・生活環境の創造
- * 女性が社会を癒す
- * トモエの存在意義を考える

主な映像資料（映画）

- 「めぐりあう朝」
- 「スタンド・バイ・ミー」
- 「母の眠り」
- 「パッチ・アダムス」
- 「フリードリッヒ・フレーベル～人間教育学」
- 「奇跡の人」
- 「ALWAYS・三丁目の夕日」
- 「マザー・テレサ」

主な映像資料（TV番組）

- 「驚異の小宇宙・脳と心～人はなぜ愛するのか（感情）」NHK
- 「驚異の小宇宙・人体～生命誕生」NHK
- 「驚異の小宇宙・人体～生命を守る（免疫）」NHK
- 「生命の誕生の神秘」NHK
- 「迷える心の風景」NHK
- 「ようこそ私の世界へ～ドナ・ウィリアムズ」NHK
- 「大江健三郎～信仰を持たないものの祈り」NHK
- 「心の病が癒されるとき～アリス・ミラーの世界」NHK
- 「閉ざされた魂の叫び～アリス・ミラーが解く子どもの時代」NHK
- 「人間とは何だ!?・～奇跡の脳・自己を探す感動の旅」TBS
- 「人間とは何だ!?・～脳の奇跡・失われた愛を探す感動の旅」TBS
- 「脳～何が人間らしさを生み出すのか」NHK
- 「奇跡の詩人・日木流奈」NHK
- 「アーミッシュの世界」NHK
- 「学級崩壊」NHK
- 「サバン症候群～自閉症の天才たち」BBC

「赤ちゃん～成長の不思議な道のり」NHK

主な文献資料

- 『人生を変えるもの』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）
- 『人間・仮面と真実』ポール・トゥルニエ（ヨルダン社）
- 『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン（新潮社）
- 『魂の殺人～親は子どもに何をしたか』アリス・ミラー（新曜社）
- 『アインシュタインロマン・エンデの文明砂漠』ミヒャエル・エンデ（NHK出版）
- 『こころの科学～母子臨床』渡辺久子編（日本評論社）
- 『別冊・発達～乳幼児精神医学への招待』小此木啓吾・渡辺久子編（ミネルヴァ書房）
- 『別冊・発達～乳幼児精神保健の新しい風』渡辺久子・橋本洋子編（ミネルヴァ書房）
- 『母子臨床と世代間伝達』渡辺久子（金剛出版）
- 『抱きしめてあげて』渡辺久子（彩古書房）
- 『子どもを伸ばすお母さんのふしぎな力』渡辺久子（企画室）
- 『家族の闇をさぐる』斎藤学（NHK出版）
- 『アダルトチルドレンと家族』斎藤学（学陽書房）
- 『仮面の家』横川和夫（共同通信社）
- 『息子殺し』斎藤茂男（太郎次郎社）
- 『家族の中の孤独』岩月謙二（ミネルヴァ書房）
- 『心が脳を変える』Jシュウオーツ・Sベグレイ（サンマーク出版）
- 『幼児教育と脳』澤口俊之（文春新書）
- 『赤ちゃんと脳科学』小西行郎（集英社新書）
- 『免疫のはなし』奥村康（東京図書）
- 『自閉症だったわたしへ』ドナ・ウイリアムス（新潮社）
- 『自閉症・治癒への道～文明社会への動物行動学的アプローチ』ティンバーゲン（新書館）
- 『母子関係障害という病』ジャン・マリ・デラシュー（光文社）
- 『パッチ・アダムスと夢の病院』パッチ・アダムス（主婦の友社）
- 『子どもへのまなざし』佐々木正美（福音館書店）
- 『星の王子さま』サン・テグジュペリ（岩波書店）



大自然の中でこそ、人間の豊かな感性が養われる。

オープンスペースの園舎は、多彩な活動がダイナミックに繰り広げられる。



トモエは赤ちゃんからお年寄りまで、いろんな人が集う場。互いに支え合い、刺激し合って、親しい人間関係を深めていく。



この沢も園庭の一部。森の中を探
険すると、いろんな発見がいつぱ
い。

木の枝にロープをゆわえたロープ
ブランコ。森のあちこちに造って
ある。



手作りプールで、ボディペイン
ティング。



演舎横の斜面に 20m 以上のスロープを作って、そうめん流し大会。果物やおやつも流れてくる。



そうめんの後には、人も流れてくる。



園舎の周囲にテントを張って、4泊5日の家族キャンプ。



泥んこプールは、とっても心地よい。

家族で楽しむレクリエーション大会。大人のチャンバラごっこ。



秋の枯葉で大暴れ。大人たちが楽しんで生活することが第一。



年末恒例の感謝祭。親子でろうそくの光を見つめるあたたかな時間。

スノーペインティング、雪と氷と色彩と戯れる。



山のブランコ。まるで空を飛んでいるみたいに感じられる。



スノーモービルに乗って森の中を走り回る。

斜度約 50 度。崖をすべりおりる。



真冬の海。いつでも、どこでも、何でも楽しんでしまう子どもたちのエネルギー。

